

期間を表すヲ格名詞句の生起条件

高井岩生

九州大学大学院人文科学研究院

takai.ling@gmail.com

ヲ格名詞句、期間、対抗動作性、動詞の投射

本稿では、「期間」を表すヲ格名詞句の分布について詳細に観察し、これらのヲ格名詞句は、「移動の経路・経由点・起点」を表すヲ格名詞句とは異なる生起条件を設定する必要があることを論じる。

1. 「期間」を表すヲ格名詞句

ヲ格名詞句には、「期間」を表すと考えられるものがある。「3年間で過ごした」というような例に現れているヲ格名詞句が典型例である。この「期間」を表わすヲ格名詞句（以下、期間ヲ句）は「過ごす」というような時間の経過を表わす動詞以外にも、下に挙げているように、いろいろな動詞と共起可能である。以下の例では、問題となるヲ格名詞句に実線を引いている。

- (1) a. 太郎は 3年もの間を 息を潜めて 隠れていた。
- b. 兵士達は 嵐のような爆撃が続く数時間を ただひたすら 西に進んだ。
- c. 私は 支援者が現れるまでの3年間で 一人で 検察と 戦ってきた。
- d. ジョンは 世間に認められるまでの十数年間で ずっと 両親に 甘えていた。

しかし、期間ヲ句の生起が常に許されるわけではない。(2)の各文の容認性はかなり低い。

- (2) a. ??親を亡くした子供達は 戦後の混乱期を 育った。
 b. ??俺は 成功するまでの10年間を 喰ってきたんだ。
 c. ??ジョンは、茨の道のような十数年間を 暮らした。

これらの文に現れているヲ格名詞句は「期間」を表すので、上の文の容認性の低さについて考える場合、思いつきやすいものに、動詞の「継続性」があるだろう。共起する動詞が「継続性」を持っているものならば、意味的に合致しやすいが、「継続性」を持っていない動詞ならば、意味的に合致しにくいとする考えである。事実、瞬間的な動作である「立つ」という動詞は、「??ジョンは 観客が賞賛の拍手を送る数分間を 立った」という文の容認性が低いことから分かるように、期間ヲ句と共起しにくい。しかし、(2)の「育つ」、「喰ってきた」、「暮らす」は、その語彙的意味に時間的な継続性を含んでいると考えられる。その証拠に、以下のように、出来事・動作が長期間継続していることを表す文に現れることができる。

- (3) a. 私は 幼少の頃から その荒れ果てた大地で 育った。
 b. 彼は 余生を 軽井沢の別荘で 暮らした。
 c. あの板前は これまで 包丁一本で 喰ってきた。

このようなことから、(2a-c)の容認性が低いのは動詞が継続的な意味を持たないからであると、簡単には結論付けることはできない。では、期間ヲ句の生起を決定する条件とは何であろうか。

(2)の動詞は自動詞であり、ヲ格名詞句を取ることができないので、容認性が低いという説明は成り立たない。なぜなら、この期間ヲ句は項名詞句とは考えられないからである。(1a, b)に現れている動詞は、対になる他動詞を持つものであるので、自動詞と考えられる¹。また、(1c, d)の動詞は、それぞれ、目的語として、ト格名詞句、二格名詞句を必要とする2項動詞である。期間ヲ句は、自動詞や目的語を伴った他動詞とも共起できるので、付加詞と考え

¹ それぞれ、左側の動詞が他動詞であり、右側の動詞が自動詞である。

- i. 車を進める／車が進む
 ii. 子供を育てる／子供が育つ
 iii. 太陽を隠す／太陽が隠れる

るのが自然であろう。

付加詞のヲ格名詞として、先行研究で分析されているものに、「状況」を表すヲ格名詞句（以下、状況ヲ句）と「移動の経路・経由点・起点」を表すヲ格名詞句（以下、移動ヲ句）がある（杉本（1993, 1995）、天野（2007, 2011）など）。本論では、杉本（1993, 1995）、天野（2007, 2011）の分析に基づいて、期間ヲ句の生起条件について考察していく²。

2. 移動ヲ句との比較

杉本（1993） p.32 (30(ii))によると、状況ヲ句と移動ヲ句のどちらにも解釈可能なヲ格名詞句がある。

- (4) a. 満天の星の下を 海岸を 歩いた。（杉本（1993） p.30 (24b)）
b. 穏やかな春の陽の中を 公園を 散策した。（杉本（1993） p.30 (25)）

これらの例のヲ格名詞句は、移動した「状況」を表しているとも、「移動の経路」とも解釈できる。杉本（1993） pp.33-34は、状況ヲ句は、移動ヲ句の一種であると分析している。

同様に、(1b)のような文のヲ格名詞句も「期間」を表すとも「移動の経路」を表すとも解釈できる。

- (5) 兵士達は 嵐のような爆撃が続く数時間を ただひたすら 西に 進んだ。(=(1b))

²天野（2011）では、移動ヲ句と状況ヲ句以外に、接続詞的なヲ格名詞句が取り上げられている。

i.二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふった。

（天野（2011） p.49 (42)）

天野（2011）第1章で取り上げられている例は、どれも「～のを」というように、ヲ格の前にノが現れている形式になっている。この点で、本論で取り上げるヲ格名詞句とは、別のヲ格の表現であると考えられるので、接続詞的なヲ格名詞句については取り上げない。

この例のヲ格名詞句は、兵士達が移動した期間とも、その期間の間に移動した経路とも解釈できる。「期間」は、緩い言い方をすれば、「動作の時間上の経路」とみなすこともできるので、上のような例が存在することは不思議ではない。このような例が存在することから、期間ヲ句を移動ヲ句の一種とみなすことができようと思えるかもしれない。もし、そうならば、期間ヲ句は移動動詞と共起できるはずである。以下の例には、典型的な移動動詞とみなせる動詞と移動ヲ格が共起している例である。

- (6) a. ジョンは 町の明かりが見えるまで 山道を 歩いた。
b. 先頭ランナーは 自分以外に誰も走っていないトラックを 走った。
c. 我々は レーダーにキャッチされないぐらい低く 海上を 飛んだ。

しかし、このような典型的な移動動詞であっても、期間ヲ句は、共起することが難しい。

- (7) a. ??ジョンは 町の明かりが見えるまでの数時間を 歩いた。
b. ??先頭ランナーは ゴールまでの1時間を 走った。
c. ??我々は レーダーにキャッチされるまでの数時間を 飛んだ。

もし、期間ヲ句が移動ヲ句の一種であるならば、移動動詞とは共起できるはずである。期間ヲ句は、(1)で挙げているように、移動動詞とみなすことが難しい「隠れる」、「戦う」、「甘える」の動詞と共起可能である。これらのことから、期間ヲ句は、移動ヲ句とは異なるヲ格名詞句であると仮定する。

3. 状況ヲ句との比較

天野 (2011) では、状況ヲ句の例として、(8)のような文が挙げられている。

- (8) a. 防衛軍は 豪雨の中を 最後まで 戦った。(天野 (2011) p.154 (33))
b. 社長退陣の怒号が響く中を、社長は 練習どおりに 演説した。
(天野 (2011) p.154 (36))
c. 二次災害が心配される中を、レスキュー隊が 頑張った³

³ (8b, c)は、天野 (2011)pp.152-153において、そもそも十分に容認される文ではない

(天野 (2011) p.154 (39))

天野 (2011) pp.152-155 では、状況ヲ句を含む文は、「<逆境>という抵抗空間を打ち破ったりその圧力に屈しないで突き進んだりして、動作を遂行する意味」(p.153)を表し、状況ヲ句はその「<逆境>を表す」(p.154)と述べられている⁴。そして、状況ヲ句を含む文は、その文が「移動・対抗動作性」(p.155)の意味を持つ場合に、容認可能になると主張している⁵。従って、次の例のように、「対抗動作性」が感じられないような文に状況ヲ句が現れると、容認性は低くなると論じている(天野 (2011) p.152, 154)。

- (9) a. 桜の花が舞い落ちる中を、社長は 練習どおりに 演説した。
(天野 (2011) p.150 (22))
- b. 二次災害が心配される中を、警報システムが故障した。
(天野 (2011) p.153 (32b))

(9a)の例では、ヲ格名詞句が「社長が練習どおりに演説する」ことを阻む「逆境」を表していない(天野 (2011) p.150)。また、(9b)では、「警報システムが故障した」ということに「<逆境>をおして、動作を遂行する意味」(p.153)がない。

ここで、先の(1)の例を見てみると、(1a-c)の例は、天野 (2011) の主張に当てはまるようである。例えば、(1c)の例では、「支援者が現れるまでの3年間」という障害があり、それに対して「一人で戦う」ことで、その期間を突破したと解釈できる。

- (10) 私は 支援者が現れるまでの3年間で 一人で 検察と 戦ってきた。
(=(1c))

とされ、?が付けられている。しかし、p.154では、?は付いていない。本論の判断では、十分に容認可能であるので、?は付けなくてよい。

⁴天野 (2011) 第5章には、「対抗動作性」が必要であることを示す例は挙げられているが、「移動性」が必要であることを示す例は挙げられていない。

⁵天野 (2011) の「移動・対抗動作性」は、あまり明示的ではない。しかし、p.154において、「移動・対抗動作性」を持つ動詞として、「突破する、突き破る、押し進む、打ち破る」などが挙げられている。

しかし、(1)の文について、そのような解釈が可能であるとするならば、(2a-c)の文についても、同じことが成り立つはずであり、これらの文が容認可能であってもよいはずである。例えば、(2a)では、戦争孤児達が育つことに対して「戦後の混乱期」が障害となっているが、それに負けないで、孤児達が育ったという解釈は可能であろう。

(11) ??親を亡くした子供達は 戦後の混乱期を 育った。(=(2a))

しかし、この文の容認性は低い。

しかし、天野（2011）が仮定している「移動・対抗動作性」というものが期間ヲ句を含む文の容認可能性に関係しているということも事実である。以下のペアでは、「ひたすら」や「もくもくと」というような、何らかの障害に対して努力しているということを連想させやすい表現が現れている方が現れていない方よりも容認性が高い。

(12) a. ??兵士達は 嵐のような爆撃が続く数時間を 進んだ。(=(1c))

b. ?兵士達は 嵐のような爆撃が続く数時間を ただひたすら 進んだ。

(13) a. ??先頭ランナーは ゴールまでの1時間を 走った。(=(7b))

b. 先頭ランナーは ゴールまでの1時間を もくもくと 走った。

これらのことから、本論では、天野（2011）の「移動・対抗動作性」は、期間ヲ句を含む文の容認性を高める要因の1つであると仮定する。しかし、期間ヲ句の生起を決定付ける条件ではないと考えたい。

4. 動詞の投射

期間ヲ句は、(3)のように動作・出来事が一定期間継続するという解釈を許す動詞との共起が難しく (2)、また、継続を語彙的意味として持っていると考えられる移動動詞とも共起が難しい (7)。このようなことから考えると、直感的には、「継続性」が期間ヲ句の生起条件になっていると思えるが、その方向で考えることには無理があるようである。

しかし、ここまで見てきた容認性が低い文の中には、動詞をテイル形や、テクル形、または複合動詞の「V続ける」の形式にすると、容認性が高くな

るものが多い。

- (14) a. ?親を亡くした子供達は 戦後の混乱期を 育ってきた。
b. ジョンは 町の明かりが見えるまでの数時間を 歩き続けた。
c. 先頭ランナーは ゴールまでの1時間を 走り続けた。
d. ?我々は 敵のレーダーにキャッチされるまでの数時間を 飛び続けた。

テイル形やテクル形、複合動詞の「V続ける」などは、「継続性」を持つ表現の典型例である。上の事実を見る限り、やはり、期間ヲ句の生起は、動詞が継続性を持っているのかどうかということによって決定されるのではないかと思えてくる。

では、次の事実はどうだろうか。以下の文には、テイル形やテクル形、複合動詞の「V続ける」という形式は現れていない。それにもかかわらず、容認性は高い。

- (15) a. ??兵士達は 嵐のような爆撃が続く数時間を 進んだ。
b. 兵士達は 嵐のような爆撃が続く数時間を ただひたすら 西に 進んだ。
- (16) a. ??ジョンは 町の明かりが見えるまでの数時間を 歩いた。
b. ジョンは 町の明かりが見えるまでの数時間を ビルと 歩いた。
- (17) a. ??先頭ランナーは ゴールまでの1時間を 走った。
b. 先頭ランナーは ゴールまでの1時間を 一人 もくもくと 走った。
- (18) a. ??我々は 敵のレーダーにキャッチされるまでの数時間を 飛んだ。
b. 我々は 敵のレーダーにキャッチされるまでの数時間を 超低空飛行で 飛んだ。

さらに、次の例では、ペアになっているどちらの文の動詞もテイル形やテクル形になっている。しかし、介在要素があるかないかということに基づいて、容認性に差がある。

- (19) a. ??俺は 成功するまでの10年間で 喰ってきたんだ。

- b. 俺は 成功するまでの 10 年間を これで 喰ってきたんだ。
- (20) a. ??ジョンは、茨の道のような十数年間を 暮らしてきた。
 b. ジョンは、茨の道のような十数年間を メアリーと 暮らしてきた。
- (21) a. ?親を亡くした子供達は 戦後の混乱期を 育ってきた。
 b. 親を亡くした子供達は 戦後の混乱期を この街で 育ってきた。

上の事実は、期間ヲ句の生起は、動詞の継続性だけに依存しているわけではないことを示している。つまり、期間ヲ句の生起には、(14)に挙げている例が示すように、テイル形などの存在が関係するだろうが、それだけではなく、介在要素の存在も大きくかかわっているということである。そこで、テイル形などや介在要素の存在が期間ヲ句の生起を決定付けるものであると仮定し、期間ヲ句の統語的生起条件として次のことを提案したい。

- (22) 期間ヲ句は動詞の投射と merge しなければならない。

テイル形などの要素も、動詞語幹と merge によって組み合わせるとすると、期間ヲ句は、動詞語幹単独ではなくて、[動詞語幹+テイル]、[NP+動詞語幹]、[NP+動詞語幹+テイル]のいずれかと merge した場合に容認性が高くなると予測される。以下の各組では、期間ヲ句が上のいずれかの形式と組み合わせられていると考えられる場合に容認性は高くなる。

- (23) a. ??ジョンは 町の明かりが見えるまでの数時間を 歩いた。
 b. ジョンは 町の明かりが見えるまでの数時間を ビルと／もくもくと 歩いた。
 c. ジョンは 町の明かりが見えるまでの数時間を 歩き続けた。
 d. ジョンは 町の明かりが見えるまでの数時間を ビルと／もくもくと 歩き続けた。
- (24) a. ??私は 罵声が嵐のように浴びせられた 5 年間で 生きた。
 b. 私は 罵声が嵐のように浴びせられた 5 年間で なんとか 生きた。
 c. 私は 罵声が嵐のように浴びせられた 5 年間で 生きてきた。
 d. 私は 罵声が嵐のように浴びせられた 5 年間で なんとか 生きて

きた。

- (25) a. ??太郎は 警察が血眼になって探している 10 年間を 暮らした。
b. ?太郎は 警察が血眼になって探している 10 年間を 息をひそめて暮らした。
c. ?太郎は 警察が血眼になって探している中を 暮らしていた。
d. 太郎は 警察が血眼になって探している中を 息をひそめて 暮らしていた。
- (26) a. ??子供達は 母親が迎えに来てくれるまでの時間を 遊んだ。
b. ?子供達は 母親が迎えに来てくれるまでの時間を 友達と 楽しく遊んだ。
c. ?子供達は 母親が迎えに来てくれるまでの時間を 遊んでいた。
d. 子供達は 母親が迎えに来てくれるまでの時間を 友達と 楽しく遊んでいた。

当然、期間ヲ句の生起は統語的に決定されるわけではない。天野（2011）の「移動・対抗動作性」や「動作の継続性」など容認可能性を決める要因になるだろう。上の(25)と(26)の容認性が全体的に高くないのは、そのことが原因であると考えられる。

5. 今後の課題と展望

本論では、期間ヲ句だけについて論じてきた。しかし、状況ヲ句も期間ヲ句と同じような特性を示す場合がある。

- (27) a. ??悪天候の中、ジョンは 他のランナーが次々に棄権していくところを 走った。
b. 悪天候の中、ジョンは 他のランナーが次々に棄権していくところを 一人 もくもくと 走った。
c. 悪天候の中、ジョンは 他のランナーが次々に棄権していくところを 走り続けた。
d. 悪天候の中、ジョンは 他のランナーが次々に棄権していくところを 一人 もくもくと 走り続けた。

この観察が正しいものであるならば、期間ヲ句と状況ヲ句はどちらもVの投射とmergeしなければならないヲ格名詞句であるという可能性がでてくる。一方、移動ヲ句は、明らかに動詞語幹とmergeしてもよいものであろう。ということは、ヲ格名詞句には、動詞の投射とmergeしなければならないものと、動詞語幹と動詞の投射のどちらともmergeしてもよいものがあるということになる。今後の課題としたい。

謝辞

本論の執筆にあたり、匿名査読者2名から大変貴重な助言を数多くいただいた。これらの助言はどれも示唆に富み、議論を構成する上で大変有益であった。深く感謝する次第である。無論、本論における議論の不備や誤りは筆者にある。

6. 参考文献

- Kuroda, S.-Y. (1978) Case marking, canonical sentence patterns, and counter equi in Japanese. In John Hinds and Irwin Howard (eds.), *Problems in Japanese syntax and semantics*: 30-51. Tokyo: Kaitakusha. 20 [Also in S.-Y. Kuroda (1992) *Japanese syntax and semantics*: 78-113. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.]"
- 杉本武 (1993) 「状況の「を」について」『九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学編)』6 pp.25-37. 九州工業大学
- 杉本武 (1995) 「移動格の「を」について」『日本語研究』15 pp.120-129. 25 東京都立大学国語学研究室
- 天野みどり (2007) 「状況を表すヲ句について」『表現学部紀要』8 pp.1-13. 和光大学表現学部.
- 天野みどり (2011) 『日本語構文の意味と類推拡張』東京：笠間書院.
- 益岡隆志・田窪行則(1987)『日本語文法セルフマスター・シリーズ 3 格助詞』30 東京: くろしお出版.
- 三上章 (1953)『現代語法序説』東京：刀江書院 (復刊, くろしお出版, 1972)

The distribution of adverbial *o*-marked NPs expressing period

Iwao Takai

(Graduate School of Humanities, Kyushu University)

In this paper, I investigate the distribution of adverbial *o*-marked NPs expressing 'period', and claim that their distribution is different from the other adverbial *o*-marked NPs including those expressing 'path of motion'. While the former must be the projections of V, the latter has no such restriction. Thus it is shown that adverbial *o*-marked NPs are divided into two groups.

(初稿受理日 2012年3月3日 最終稿受理日 2012年7月25日)